
ヒトデ

霜月 梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトデ

【Nコード】

N9126C

【作者名】

霜月 梅

【あらすじ】

千絵里は結婚式の日を迎え、高校時代を思い出していた。『私と先生はあの頃感覚で生きていた』大人になって千絵里が先生にお願いしたこととは、先生に対する千絵里の復讐なのか・・・！？

プロローグ

『・・・ねえ先生、私あの頃の事恨んでなんか居ませんよ。』

好きとか嫌いとかじゃない、ただ感覚で繋がってました。だから恨みようが無いのです。

先生もきつと感覚で繋がってましたね？

先生は感覚で生きる人でしたから。

倫理とか道德とか関係無しで、ひたすら本能のみでした。本能の中に精神の繋がりと云うのが、有ると言ってしまうえば有りました。

私には・・・多分。

先生を恨んでお願いしたわけではありません。

ただ、純粹に素直に高校生の頃の私のことを1番よく知っているのは先生だと思ったから、お願いしたのです。

第一章：結婚式（控え室）

「あらー綺麗ね！！」思った通りだわ。千絵里は背が高いから、シンプルなドレスが似合うと思ったのよ。」

母は勝ち誇ったようにはしゃぎながら言った。

確かにコンプレックスだった背の高さが、こんなに白のシンプルなドレスを映えさせるとは思っても見なかった。

ほとんど飾りの無いタイトな作りのシルクのドレスは冷たく私の身体を包んでいた。

「ありがとう。でも、お母さんが結婚するわけでもないのに凄いはしゃぎようね。」

私は苦笑いを浮かべながら、母を見た。

「あなたが落ち着きすぎなのよ。当事者なのに他人事のように！嬉しくないの？」

母は心配になったのか、私の顔を覗いた。

「嬉しいわよ。もちろん！緊張しているだけよ。」

私は母が心配しないように答えた。

今日は天気が良くてよかった。雨は嫌いでは無いけれど、心が安定していないと気分を鬱にさせる。

結婚する花嫁は普通はうきうきとして、母のようにはしゃぐのだらう。

当事者の私は、嬉しくない事はないけれど、天に舞い上がってしまうほどの幸福感では無い。

結婚というのはゴールでは無く、新しいスタートだ。

この人だと思ふ人を実際の目も心の目も皿の様に大きくして、しっかりと見ながら選んできた。

そして、私が最終的に選んだ人は、感覚では無く現実を生きている田中拓海と言う男。

拓海は高校の1年先輩で、委員会が一緒だった為に面識はあったもののほとんど話という話はしたことが無かった。

拓海と結婚するまで関係が進むようになったきっかけは、私が社会人になり看護師となって働いていた病院に、拓海が患者として来院し、再会したからだった。

第二章：再会

総合病院の内科のロビーは早朝からかなりの患者が来院していて忙しい。

中堅所に位置して働いている私は上からの指示に従い、下の者には指示をしてかなり忙しく動き回っていた。その時、背後から肩を軽く叩かれ

「綾瀬さんだよね？綾瀬千絵里さんじゃないですか？」

チャコールグレーのスーツに、薄いほとんど白に近い水色のカッターを着た、いかにも清潔感漂う私の苦手なタイプの男性に声を掛けられた。

「はい。そうですが。何か？」

忙しかった為、少しきつい言い方になってしまったことを軽く後悔している

「僕だよ！田中拓海！高校の時同じ放送委員だった！！あっ僕の方が一つ上の学年だったし覚えてないかな？」

男は少しはにかんだ笑顔を浮かべながら、右手の綺麗な指先で頭を軽く掻いた。

「あっ・・・田中先輩。」

私はその仕草を見て、あの放送室の埃臭さと一緒に黒ぶち眼鏡を掛けた田中拓海を思い出した。

「思い出してくれたんだね。良かった。ごめんね、忙しい時に呼び止めて。」

拓海はさわやかな笑顔を浮かべると待合室の椅子の方に向かおうと

した。

「田中先輩！コンタクトになっていたので、なかなか気が付きませんでした。ごめんなさい。」

私は冷たい態度をとったのが、気に掛かり謝った。

「いいんだよ。僕はすぐに分かったよ。綾瀬さんは昔と変わらず綺麗だったから。」

気が向いたらで良いから連絡してくれると嬉しいよ。色々話とかもしたいし。」

拓海は恥ずかしげも無くそう言うと、連絡先の書いた紙を手渡した。

「ありがとうございます。」

私はそう言うとその紙を受け取りポケットにしまった。

結構スマートにこういう事出来る人だったんだ。大人になってそういう風になったのかな？

私はあのタイプはやっぱり苦手だなと思いながらも、一応連絡はしようと思った。

第三章：墮ちる

『4時限目の授業って何でこんなに眠いんだろう・・・。』
『ああでも、五時限目はもっと眠いか。』

私は重たくなる瞼を必死に開けて眠気と戦っていた。

キーンコーンカンコーン♪

「はあく助かった。」

授業終了のベルを聞いたらホッとして、思わずため息と一緒に言葉も出てしまった。

「綾瀬さんでも授業中眠たかったりするんだね？」

隣の席の鈴木なんたらさんが話しかけてきた。

私はクラスメイトに限らず学校のほとんどのことに無関心で、全てが億劫だった。

鈴木さんの下の名前すら知らない。

「ほとんどいつも午後に近い授業は眠いよ。鈴木さんは眠くないの？」

「私はもちろん眠いよー。でも、綾瀬さんは成績いつも学年10位以内に入ってるでしょ？」

鈴木さんは面白い事を言う。成績の良し悪しと授業中眠いかどうかは全く別の話だ。

でも、そんなことをそのまま彼女に言ってしまうえば角が立つので、私は適当に笑って話を合わせて誤魔化した。

私は昼食も一人で食べる事が多かった。友達と言う友達は居らず、一人で過ごす方が楽だった。一緒に食事をしようと誘われるのが嫌で、放送委員になった。放送委員になれば昼休みは放送室で仕事をしながら、食事をする事が出来た。

放送委員は1年生2年生各クラス1名で交代で担当が変わるようになっていた。

私の通っていた学校はかなり進学率の高い進学校だったので、3年生はほとんど委員会などの仕事や部活動からは遠のいていた。クラスも2クラスにしか分かれていなかったので、私は週に1、2度は放送室で過ごせた。

放送室で食べない時には、屋上やほとんど幽霊部員になっている美術部の部室などで食べた。

「綾瀬！綾瀬千絵里！」

私が放課後学校の中央に有る中庭のベンチで本を読んでいると、美術部顧問の桜井が声を掛けてきた。

桜井は生徒をお前と呼んだり、上から見下すように話すことの無い貴重な教師で、私は密かに好意を抱いていた。

何と言っても、汚くは無いが清潔感もあり無く、常に無精ひげの生えている細い顎や姿形にも魅かれていたのかもしれない。

私はそのページの気になる二、三行に目を通すと顔を上げた。

「たまには部に顔を出しなさい。」

桜井は半分呆れた様に言った。

「明日には行きます。」

「綾瀬、俺は借金取りじゃないんだ。明日は行く、明日は行くってもう聞き飽きたよ。」

ため息を吐きながら言った桜井の言葉が、掛け合いの様に当てはまっている事が妙に可笑しくて、私は思わず大きな声で笑ってしまった。

笑った後にしまった怒られるかな？と思ったが、桜井の反応は意外なものだった。

「綾瀬はそんな笑い方する時もあるんだな。なんか安心したよ。」
そう言う私の唇を自分の唇で塞いだ。

風が不意に吹き落ち葉が私の頬を擦った。

「先生……。」

塞がれた唇の横からかろうじて言葉が洩れる。

桜井は身体を離すと一応辺りを見回して人が居ないのを確認した。
私の方に向き直した桜井の唇に今度は私の方から唇を重ねていった。

『温かい……人ってこんなに温かいんだ。』

私は初めての感触に浸って、再び自分から桜井に乞うてしまった。
何度も何度も繰り返す。

第四章：感覚

―放送室は埃臭いが、暖かい。
まるで先生のようなだ。

「今日のお弁当は、オムライスなのに卵焼きかぁ。お母さん又卵の賞味期限見ずに買ったなぁ。」
もちろん誰も居ない放送室での独り言。

『コンコン』

私の折角のお弁当タイムを邪魔するように、誰かが放送室のドアをノックした。

「綾瀬さん。お疲れ様。いつも仕事熱心だね。今日も二年の代わりを引き受けてくれたんだってね。」

私のお昼の時間をお邪魔してくれたのは、放送委員長の田中先輩だった。

「いや、良いんです。私、放送室好きなんです。先輩こそわざわざ劳いの言葉を掛けに来てくれたんですか？」
少し厭味ばかったかな・・・。

私はどうもこの清潔感があって紳士的な田中先輩が苦手だった。

「いやいや、綾瀬君は真面目で仕事熱心だなって思ってたから、ちよっと様子を見に來ただけだよ。」

田中先輩は頭を右手の細い指で掻いた。これは彼の癖のようで一緒

に話をする時は必ずと言って良い位この行動をしていた。

「でも、放送室が好きなんて変わってるね。なんか埃っぽいし、生暖かくて嫌いな人の方が多いんじゃないかなあ。」

「私は埃っぽくて生暖かいから好きなんです。」

『ああ、昼休みが無くなっちゃう。』

私は内心イライラしていたが、態度には出さずに何か田中先輩を上手く追い出す方法は無いかと考えていた。

「あっ！もうこんな時間か。職員室に呼ばれてるんだった。じゃあ失礼するよ。綾瀬さん頑張ってね。」

考えるまでも無く田中先輩の方から出て行ってくれた。

「お疲れ様です。」

私は軽く会釈すると、また黙々と玉子だらけのお弁当を食べ始めた。

美術部の部室は放送室と同じで埃っぽい。

でも、放送室の乾いた感じは無くて、どちらかと言うと湿っている。暖かさも無い。

私は先生とキスをしてから、真面目に部に出るようになっていた。美術部は部員が一応5人ほど在籍しているが、ほとんどが体育会系の部との掛け持ちの生徒ばかりで、ほとんど部にでてくる事は無く、実質私ともう一人女子が1名時々出てくるだけだった。

この1名の女子は、体が弱く週の半分位は欠席していたので、部に出てくるのは週に1、2度だった。

「綾瀬はあの日から、真面目に出てくるね。」

先生は意地悪な笑みを浮かべながら言った。

「先生の感覚が良かったです。唇だけじゃなくて、身体のおうとつがぴったり合う気がしました。」

「感覚か……。俺もそう感じたよ。綾瀬の笑う顔を見てたら、自然とキスをしていた。」

今日はもう1人の女子は居ない。

先生と何でも話せて、何でも出来る。
私は身体の芯が熱くなるのを感じた。

「先生。キスするのに理由は要らないですよ？好きだからとか、愛してるからとかまだ分からない状態なんです。」

「でも、ただただ先生とキスがしたい。あの温もりを感じたい。私、人と関わるの嫌いなんです。でも、先生とだけは関りたい。」

―あの時の私の言葉は完璧な愛の告白だったのかもしれない。

私の言葉を聞いた後、先生は私の方へ近づいてきた。
先生は私を椅子から立たせると、キスでは無く身体を抱きしめてきた。

「ああ、理由なんて要らないよ。」

私の耳元に先生の湿った囁きが響く。

「先生……。」

私は我慢出来なくなり、先生の唇に自分の唇を激しく重ね合わせた。キスは段々と激しさを増し、私は立っていられなくなり部室の床に足元から崩れて行った。

先生が唇を離すと二人の唇から唾液が糸を引いた。

一度離れた唇を先生は私の額や頬に舌と一緒に這わせた。

耳たぶを噛みながら、耳元では「千絵里。」と囁いた。

先生の愛撫は激しく優しい。そして生温かく湿っている。

第五章：優しく冷たい男

―海の匂いにする石畳の遊歩道沿いにあるイタリアンレストラン。その窓際の席で私は文庫本を読みながら、田中先輩が来るのを待っていた。

先輩との病院での再会の後、何度かデートをして今日は5度目のデートだった。

店員に案内をされながら先輩が私の席へと向かってきた。

「ごめん。待たせちゃったね。」

「いいえ。そんなに待ってませんから。」

私は先ほどから読んでいた文庫本にしおりを挿むとバッグの中にしまった。

『今日辺りこの人とセックスするのかな……。』

私はイベリコ豚の生ハムを口に運びながら、そんなことをふと思っていた。

先輩は私に好感を持っているようだった。すごく紳士的で優しかった。

真面目な性格のようだし、マニュアル重視な感じだからきつとコトに及ぶなれば、今日辺りだろうと私はにらんでいた。

いつもより私は少し多めにワインを飲んだ。

アルコールには催淫効果が有ると私は思う。あまり多量に摂ると逆効果だが、適度な量飲むと飲まない時よりも大胆になれる気がした。

食事が終わると二人で石畳の遊歩道を散歩した。

先輩は人通りが無い場所に着くと、私を抱き寄せてキスをしてきた。海の匂いが鼻腔を突く。

「今日は帰らなくても大丈夫？」

先輩は優しく紳士的に尋ねてきた。

「ええ。大丈夫です。」

私の答えに先輩は少しほっとしたようで、軽く微笑んだ。

先輩が私を連れて行ったのは、モーターでは無く海沿いにあるシティホテルだった。

『結局することは同じなんだから、私はモーターで良かったのに・・・』

私はモーターの方が好きだった。

シティホテルの清潔で冷たい感じは落ち着かない。

モーターの綺麗だけど清潔過ぎず、少し湿った生温かい感じのする方が落ち着けたし、卑猥な気持ちにもなれた。

先輩は部屋に入ると、慣れた手つきでウィスキーの水割りを作り一つを私に手渡した。

もう一つの水割りを先輩は一気に飲み干した。

「先にシャワー浴びるね。」

先輩はそう言うのと私の答えを聞くまでも無くバスルームへと向かった。

先輩がバスルームから出た後、私もシャワーを浴びた。

バスルームから出ると、薄暗い部屋のベッドに横たわった先輩が私に手招きをした。

私は先輩の隣に横にはならず腰掛けた。

背中に温もりを感じる。

背後から抱きすくめた先輩の両手が私の鼻先で揺れている。

相変わらずの綺麗な指。

「もう千絵里って呼んでも良いかな？」

確かにセックス中に綾瀬さんでは色気が無い。

「私も、拓海って呼んで良いですか？」

「ああ、そう呼んで欲しいな。」

そう言うのと同時に拓海は触れるか触れないかの軽いキスをした。

それがスタートの合図の様に二人のキスは激しいものへと変わって

行った。

拓海は私の身体を包んでいた白いバスタオルを剥ぐと、首筋、胸、腹部へと上から下へ決まった順番のように唇を這わせた。

拓海のアプローチは優しいのに冷たくて、シティホテルのように落ち着かない。

第六章…春が来て居る場所

屋上のお昼ご飯は放送室の次に落ち着く。

2年生になった私は放送委員の仕事が減ってしまい、止むを得ず次点の屋上で昼休みを過ごす事が多くなっていた。

私はいつものお母さんお手製のお弁当を食べた後、屋上で空の雲の動きをぼんやり眺めていた。

『ギイイイーーーボタン』

油を注さないとまずいのでは無いかと思われる不快な音が聞こえる。

誰かが屋上に来たようで、私は開けっ放しにしていたお弁当箱の蓋と口元を閉めた。

「綾瀬、やっぱりここか。」

口元に軽く笑みを浮かべながら、先生が私の横に腰掛けた。

「先生はお昼済んだんですか？」

「ああ、今日は売店でパンを買って軽めに済ませたよ。」

春の日差しは優しく暖かい。
段々と私は眠くなってきた。

先生はそんな様子の私を知ってか知らずか、軽く頭を撫でてきた。こういうことも感覚でやる人だ。

雲が風に流されるように、空気を読み取ってして欲しい事をしてくれる。

私が雲で先生が風で、そこに深い意味など無くて今そうしたいから唯そうする。

先生と生徒、男と女、『好き』や『愛する』や『恋しい』そういうの全く関係無しで、

その時の流れで欲で感覚で先生の側に居た。

「綾瀬、今度の休みに海に行かないか？」

先生の唐突な案に少し驚いて目が覚めた。

「それってデートってことですか？」

「どう受け取ってもいい。ただ綾瀬と海に行きたくなった。」

そう言った先生の横顔が、少し寂しげに見えたのを気のせいだと思いたかった。

「じゃあスケッチ大会ってことで！」

私はわざと少し明るめに答えた。

「二人だけで大会って言うのも何だけど、まあそう言う事で！日曜の朝10時に駅の改札に集合！」

先生も少し明るめにそう言うと、私を軽く抱きしめた。

春の陽だまりのように乾いたお日様のにおいがする先生の胸に、鼻をくつつけるとなぜか胸が締め付けられた。

先生は私の顎を軽く上げると、包み込むようなキスをしてきた。

暖かく溶けて行きそうな感覚に私は立っているのがやっとで、先生は私の制服のスカートの間に自分の足を入れ私を支えてくれた。

先生と行為に及んだ後は、必ずと言って良いほど涙が流れた。

先生の動きに合わせて体中の液体、組織全部が逆流するような感覚に襲われて、全部ぐちゃぐちゃになって溶けて一つになって、切なくて胸が締め付けられて涙が流れた。

先生と私は前世と言うものが有るのなら、同じDNAを持っていたのかもしれない。

第七章：自切

春の海の風はまだ肌寒い。

地元の駅で待ち合わせて、先生と私は電車で40分ほど掛かる町の海に来ていた。

私は海に行くのなら岸壁のある海では無く、砂浜だけの海に行きたいと言ったら、

先生も同じ考えだった。

二人とも会話をほとんどすることも無く、並んで砂浜を歩いた。ある程度歩くと少し休憩できるようなスペースが有り、そのベンチに腰掛けた。

「スケッチ大会なのに絵の道具全部忘れちゃいました。」
恥ずかしくて、私は髪を掻きながら苦笑いをした。

私は先生と初めて学校以外で逢う事に完璧に舞い上がっていた。先生が海で多分、私が聞きたくないような話することは予想が出来ていた。
それでも、不安以上に嬉しさが勝っていた。

「綾瀬と一緒に居る時間が長くなるにつれ、綾瀬の色々な面が見れて楽しいよ。」

先生は私の頭を軽く撫でながらそう言った。

お昼の時間が近づいて来た為、私達は近くの食堂で軽くご飯を済ませた。

先生はこの後どこかに行きたいか尋ねてきたが、私は行きたい場所

も無くどうせなら海に戻りたかったので、そう答えた。

夕暮れ近くの海は風が更に冷たくなっていた。

私は薄手のパーカーを羽織った。

ふと先生の方を見ると先生も薄手のジャケットを同じタイミングで羽織っていた。

「先生、真似しないで下さい。」

「綾瀬が真似したんだろー。」

二人で同時に笑った。

「きれいー。すごっく綺麗。ねえ先生っ！」

私は落ちていく夕日を指差して言った。

春の空の雲がピンク色に染まって行く。

なんだか私は切なくなってきた、先生の肩に頭を預けた。

「ねえ、先生。今日私に何か話があったんでしょ？言いにくい事でも私は大丈夫だから話して。」

その姿勢のまま私は先生の顔を上目遣いに見ながら言った。

「綾瀬、俺結婚する事になった。」

先生は何の動揺もなくハッキリとした口調でそう言った。

私は少し動揺した。

先生の言葉には無くて、ある程度こういう話だろうと言う事は予

想が出来ていたのに、
傷ついている自分の心に動揺していた。

先生にセックスの後に見せる涙以外の涙は見せなくなかった。

涙を見せない為に何か他の話題に変えようかと思ったとき、私の視界の隅に乾いているのか湿っているのか分からない星形の生物が映った。

「先生、ヒトデってトカゲの尻尾みたいに、自分の身体を切って又再生する事が出来るんですよ。」

砂浜近くに居るヒトデを指差して私は言った。

「再生能力が高くて簡単に自切しちゃうんです。真っ二つに切れても再生して、その場合は二匹になるんですよ。」

砂浜のヒトデは少しグロテスクな表皮を夕陽に翳しながらただそこに存在する。

生きているのか死んでいるのかの判断が微妙な具合の・・・でも、多分生きている。

私は言い訳も説明も何もしない先生に話し続けた。

「私と先生は最初の一つだったけど、真っ二つになって再生した片割れ同士だったんですよ。」

「だから、心とか愛情とかそんな高尚な物じゃなくて、感覚で結びついてただけです。」

「乾いてたり湿ってたり、ただただ欲したり、我慢せず押し付けたり押し付けられたりそんな感覚で・・・。」

先生は黙って私の話を聞いていた。

「気にしないで下さい。片割れさん!」

私は勢いよく立ち上がると、お尻に付いた砂を掃った。

「私は自切して再生します。先生今までありがとうございます。」

別れの言葉を伝えると、私は一人で駅の方へと向かった。

真っ二つになったような心の片割れを必死に抱きしめながら。

第八章…さよならをする為に

先生が新幹線で1時間ほどある町でお見合いをして、その町にある実家の家業を継ぐことになった話を私は先生ではなくて、二年生の終業式で聞いた。

『先生、長男だったんだな……。』

私はそんなことをふと思いつながら、体育館のステージで挨拶している先生の事を見ていた。

終業式が終わり教室に戻る為、いつものように一人で廊下を歩いていると、先生が小さいメモ紙を私に手渡した。

『放課後部室に来て欲しい。』

白いメモ紙に一行そう書いてあった。

放課後、私は美術室に行こうかどうしようか迷ったが、一方的なさよならをしたことが気に掛かり、先生の話を聞く為に美術部の部室に向かった。

ガラガラと引き戸を開けると、いつもの埃臭く湿った部室の空気が流れる。その空気が緊張している私を少し落ち着かせてくれた。

「綾瀬……。」

部室の隅の方の椅子に先生は座っている。

私は先生の前まで行くと、ひざまずき先生の膝の上の手を両手で握り締めた。

「温かい。先生の手はいつも温かいね。」

私は先生の手の甲に軽くキスをした。

「綾瀬、結局何も話さずにごめん。上手く言う自信が無かった。」

先生の暗い顔は見たくなかった。

「いいの。色々、私には分からないジジョーが大人には有ると思いますから。」

そう軽く返事をした。

「綾瀬が言うように、俺と綾瀬は同じ体だったのかもナ。兄弟みたいな家族みたいなそんな感じの感情を持ってるくせに、身体も欲しかった。綾瀬と一つになると安心できた。」

私の好きな笑顔を浮かべながら、先生はゆっくりと話す。

「先生、最後にもう一度一つになってもらえますか・・・。」

私は無理だと思いつながらも抑える事が出来なくて、そう先生にお願いした。

先生は少し戸惑ったようだったが、すぐにいつもの笑顔を浮かべ私を軽く抱きしめた。

美術室の木の長机の上に先生は私を優しく横にさせた。

先生は耳たぶを軽く噛むと、耳の中に舌を捻じ込んだ。

先生の唾液と息遣いしか聞こえない。

私の両手は先生の手首で硬く繋がっていた。

耳元で聞こえる先生の息遣いが、謝っているように聴こえ切なくて、私の頬には先生と一体になる前から涙が伝っていた。

―あの日、先生が私にキスをした日、キスがスイッチをONにして二人は一つに戻ろうとした。

あのキスが始まりの儀式なら、今日のこのセックスはスイッチをOFFにする最後の儀式。

もう一つになる事も無い、なりたいたも思わないようにする最後の儀式。

「先生・・・さよ・・・なら。」

繋がってる身体で私は途切れ途切れにそう言った。

第九章：情

拓海との交際ほとんどん拍子に進んで、交際が始まった年のクリスマスにプロポーズをされた。

結婚式は6月。ジューンブライド。何もかもがマニュアル通り。拓海のような男は安心できる。面白味は無いが、結婚するには持つて来いの男だと思った。

『結婚は愛より安定とお人柄。』私の心の格言。
先生と離れて、社会人になりそれなりに恋愛はしたけれど、あんな感覚になれるのは先生だけだった。

一緒になると言うことが『結婚』ならば、私は先生と結婚したかった。精神的にも肉体的にも一緒に一体になったのは先生だけだったから。

それなりの恋愛とそれなりの人生を歩んできて、結婚に対して行き着いた結果は愛や感覚では無くて、ひたすら現実。現実に必要なのは、安定と相手の人柄のみ。

寂しい事かもしれないが、私の行き着いた結果はそれだった。

結婚式のスピーチを頼む事になり、思い返してみれば高校時代から

友人らしい友人は居なくて、困った私の頭に浮かんだのは先生だった。

先生の実家の住所や連絡先は知っていたので、私は電話で了解を得た後に先生の実家のある町の駅へと向かった。

先生の実家は食料品の卸問屋で、訪ねていった私を迎えてくれたのはしっかり問屋の社長さんといったいでたちになった先生だった。

倉庫で腰に前掛けをして指差し確認をしている人物は、高校の時の美術教師に全然結びつかなかった。

「先生、雰囲気変わりましたね。」

先生の邪魔にならないように端に避けながら私は言った。

「そりゃそうだ。あれから10年近く経つんだから。メタボ予備軍だよ。」

脇腹を摘みながら先生は私の横に腰掛けた。

「お仕事もう良いんですか？」

「ああ、もう落ち着いたから大丈夫。」

隣で座って会話していても、あの頃のような落ち着いていた中に有るドキドキする感じも感じられない。

ただ、ひたすら落ち着く感じがするだけだった。

「DNAお兄ちゃんかお父さんになっちゃったんだな。」

私は小さな声で呟きながら安堵の笑みを漏らした。

「何か言ったか？」

先生が不思議そうな顔でこっちを見る。

「今日は先生にお願いがあって来たんです。」

「金以外のことなら良いよ。」

先生は笑いながらあの頃のように私の頭を撫でた。

その行為にドキッとした自分に驚いた。あの頃と似ているけれど少し違う感覚。でも、あの頃の甘さを含んでいて、それはそれで私は素直に嬉しかった。

「結婚式のスピーチお願いしたいんです。」

結婚する事と結婚相手のことについては予め話してあったので、先生もおおよそ見当は付いていた様で優しく頷いてくれた。

「美術部の顧問として喜んで出席させてもらうよ。」

教師と言う立場を改めて強調されたようで私は胸が少し苦しくなった。

倉庫の入り口の方から、お盆にお茶とお菓子を載せた可愛いおばちゃんと言った風貌の女性が入ってきた。

「遠いところから、よく訪ねてきてくださいました。」

にこにこ笑う顔はお多福の様に愛嬌があって可愛い。

「かみさんだよ。」

先生が答えの分かっている私に強調するように奥さんを紹介した。

「いえいえ、初めまして。お構いなく。」

私もお多福に負けなくらいにこにこ笑って挨拶をした。

女としての嫉妬と言うよりも、妹が兄を取られた様なそれに近い嫉妬。そんな感情が私の中に芽生えていた。

先生とお多福を交互に見るとやっぱり合っている感じがした。

そこに愛や恋は無いかもしれないけれど、安定と家族の情があるように感じられた。

先生夫婦を見ていると、あながち私の結婚に対する格言も間違っていないように思えた。

まだ少しあの頃に囚われていた私の半身が、戻ってきて一つになった気がした。

第九章：情（後書き）

ちよっとさぼってました。すみません（^^;）
頑張って更新しますので、よろしく願います。
次かその次くらいが最終になると思います。

最終章：本当の思い出になる日

『コンコン』

控え室に乾いたノックの音が響く。

すっかり用意の整った私を見に拓海がやってきた。

「綺麗だよ。千絵里。」

拓海は本当に見惚れているようだった。

「ありがとう。」

私は新妻よろしく初々しく微笑んだ。

背中に変な汗を掻いてしまいそうだ。

タキシードを着た拓海を改めて見てみると結構イイ男だ。

面白味は無いけれど。

「拓海も素敵だわ。」

一応マニュアル通りお返しの言葉を掛けた。

半分は本心だけど。

普通花嫁はこの辺で、「お父さんお母さん今までありがとう。」とか挨拶しながら涙の一つでもこぼして、美容師さんとかお世話係りの人に

「あらら、折角したお化粧が取れてしまいますよ。」

なんて言われて差し出されたハンカチで目元を押さえたりしなければいけないのではと少し不安に思ったが、そうする前に式場に案内される時間になった。

梅雨の時期の晴れ間は本当にありがたく、控え室のカーテンをキラキラと輝かせていた。

式は滞りなく進み、先生もユーモアを交えながら見事なスピーチを披露してくれた。
寂しくなるくらい見事に。

私は内心先生にスピーチしてもらうことに不安を感じていた。
自分で頼んでてなんだが、先生が何を話すとかと言う事ではなく、私が頼んだ理由を先生が誤解していたらと言うことに不安を感じていた。

あの頃の私を一番知っているのは先生だと思ったから、ただ単純にお願いしただけだった。
先生に恨みなど無かった。

きつと好きだったし、愛していた。
でも、それを感覚と言うものだけに置き換えようとした。
ドライな関係にドライな思い出しにしかかった。
本当は湿って、グジグジしていたのに。

現に先生夫婦を見るまで私は過去に囚われていた。
海でさよならした日の半身を抱えたまま。さよならの儀式は何の意味も持たず囚われていた。

『あの頃の私にとって、先生は美術室、放送室、屋上でした。』

先生へのお礼状にそう一言だけ付け加えようと思います。
それが全てだから。

先生に出逢えたから今の私がある。

先生と過ごした時間は陳腐な言い方かもしれないけれど本当に宝物
で・・・

前向きに歩く力と勇気を身に付けたのは自分の力かもしれないけれど、
ど、

その土壌を育んでくれたのはきっと先生だ。

二次会の会場に行く為に拓海が迎えに来てくれた。

夏の日には落ちるまでに時間があって、まだ薄暗い程度だ。

車までエスコートする拓海の手は最後に握った先生の手よりも温か
かった。

最終章：本当の思い出になる日（後書き）

あまり結婚式には詳しくない為、想像のみです。

なのであまり奥行きも出来ず申し訳ありません（^^;）

読んでくださる方が居るだけで、本当幸せです。

最後まで読んでくださった方本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9126c/>

ヒトデ

2010年10月28日05時15分発行